

未佑ママの話

蜜瀬かえで 著

「今日は意外と早く上がれたなあ」

まだ明るい夏の空に、誰ともなしにひとりごちた。

自宅への道を、山に向かって緩く傾斜のかかった大通り沿いに行くと、暮れゆく夏の空にすれ違う風がすつと心地いい。

いま何時くらいだろう？　と改めて時計を見たら、まだ7時前だった。

実はこれ、私にとっては結構早い方の部類の時間帯だったりする。

まあ、このところは普段に輪をかけて忙しかったというものもあって、家に着くのも日付が変わる頃なんていうのめたびたびだったし。

「……ふう」

ずっと離れて暮らしてた愛娘とも、ようやく一緒に暮らせるようになったというのに。

「なんか、損した気分だなあ」

空に向かってつぶやいた。

でもまあ、その生活のためにも、お仕事は大事なわけで。

「なんて」

半分は建前で。

残念とか、あの子に申し訳ないなって気持ちには確かにあるのだけど、それが不満にならないところで、私ってほんとに仕事人間なんだなあ、とか。自分自身に呆れてしまう。

……はあ。

仕事は、うん、だからその分、胸を張れる程度にはやれてるつもりだけど、

「反対に、母親としては全然ダメ」

言い聞かせるように口に出す。

だからこそ、今日みたいに早く上がれた日には、一分一秒でもあの子と一緒に時間が作るため、わき目も振らず家を目指す。

まあ、普段から寄り道なんてするような甲斐性すら元々ないのだけどね。

「というか、帰ったら温かいお風呂とご飯作って待つてくれる娘がいるとか。私、どれだけ恵まれてるの、っていう話」

それに対して、私の出来ることなるべく早く家に帰るって。

「普通はそれが、最低限のラインでしょう？」

嘆息。

でも、

「落ち込むのは、違うよね」

手こずった仕事も一山越えて、ようやくに落ち着きつつある。

だから挽回は、これからできる。

「ううん。挽回しないと、だね」

切り替えは早く。

たとえば、そう、あの子ももうすぐ夏休みだから。

有給を使ってすこし遠出するのとかいいかもしれない。それこそ海なんて。

「……そういう人の多そうなところはやっぱダメかな？」

あの子、人前で水着とかちよつと抵抗ありそうだし。

（あ、でも友達のあの子とだったら、ひよつとして……）

思い浮かんだのは、この間会ったばかりの娘の友達。

前からよく話には聞いていたり、家の前まで娘を送って行ったりはしたことあったのだけど。ちゃんと顔を合わせたのはこの間が初めてだった。

「玉置ちゃん、か」

娘と一緒に住むことが決まったとき、やっぱり一番心配だったのは、あの子がこっちの暮らしのなじめるかどうか

ということ。

ずっと田舎暮らしをさせてたせいかな、少しだけ引込み思案なところもあって、こっちに来た始めの頃なんて駅前に出るのでさえ怖がっていたんだけど。

玉置ちゃんと仲良くなってからは、駅前の方へもよく二人で洋服を見に行ったりもするようになって。

「あの子の場合、ほんとに見に行ってるだけなんだけどね……」

苦笑い。

あの節約癖は、ほんとどこで身に付けたんだか。

母さんが色々教えてたっていうし、私がそういうのに無頓着な分、きっちり仕込まれたのかもしれない。

うわあ。また自分のダメなところ発見だ。

頭を振る。

「いやいや。いま考えるのは、楽しいこと楽しいこと。ポジティブー、ポジティブー」

そう。

玉置ちゃんと仲良くなってあの子にも積極性が出てきたのだし、海だつて玉置ちゃんも一緒につて誘ったら案外乗り気なんじゃないかな？

「まあ、玉置ちゃんは玉置ちゃんで、ちよつと危なっかし

いところのある子なんだけど……」

そこはうちの子がうまくブレーキになっているようだし。

それに、

「玉置ちゃんの前だと、どうも大人ぶろうとするんだよね、あの子」

この間玉置ちゃんが遊びに来てたときの様子を思い出すと、あの子には悪いけれど、どうしたって頬がにやけてくる。

「玉置ちゃん、確か今日も来てるんだよね」

期末試験の勉強と一緒にするって言っていたので、今日はまだそのまま泊まっちゃいなさいと伝えてある。

玉置ちゃんのおうちは今、両親そろって海外に行ってるらしくて、家に帰っても一人だっというので。

私としても、なるべくうちの子には一人でいてほしくないっていう想いがあるのだけど、それ以上に。

「あの二人、ほんとに仲良いからな」

親の私が少しだけ妬けちゃうくらいには。

でもだから、二人が一緒にいたいと思ってる間は、なるべく一緒にいさせてあげておきたいんだよね。

「まったく、ダメな親だ」

娘の友達まで言い訳に使って。

苦笑しつつ、

「さて、2人はどうしてますことやら」

ちよっぴりワクワクしながらアパートの階段に足をかけた。

「ただいまー」

「お母さん。おかえりなさい」

玄関を開けるとすぐ、続きの居間にはあつと輝く娘の顔。そして、

「未佑ママ、おかえりなさい！」

居間のテーブルから身を乗り出すようにして明るい髪と、人なつっこい顔がのぞく。

「玉置ちゃん、いらっしやい」

「おじゃましてまあすつ」

ピツと手を伸ばす姿に、つられて私の目尻も下がった。テーブルの上には問題集に、教科書とノート。

「勉強はどう？ 進んでる？」

「あたしはもう終わったよ」

おー。

娘から、頭のいい子だとは聞いてたけど。

確かに、広げられた問題集には、綺麗な字で回答が埋められていた。

「未佑も、さっき終わったところで、休憩してたところだよ」

「そうなの。えらいね」

良い子たちで、お母さんは大変嬉しいぞ。

つい急いで帰ってきちゃったけど、何かご褒美を買ってきても良かったかもしれない。

「へへ。えらいだなんて、ねー未佑？」

照れくさそうに隣いる娘に声をかけるけれど、

「……え？ あ、うん」

こっちはさつきからわかりやすいくらいに、そわそわとした感じで私のことをちらちら見えてきて。

（いつもだったらすぐにでも飛びついてくるくらいだもんね？）

今日は玉置ちゃんがいるからできないでいるんだなーとか察するのは少し可哀想な気もしないでもないけど、（こうやってちよつとずつ大人になっていくんだな）

なんて思うと、母親やってて良かったなあって愛おしさが増す方が大きかったりもする。

だから、

「未佑」

「？」

「もいつかい、ただいま」

今日は私から。

「……あ」

頭を優しくなでると、照れくさそうにうつむくけれど、けつしてイヤそうな素振りをしないところがとても微笑ましかったので、

「ほら、ぎゅー」

いつもみたく、さらに抱きしめてみたりもした。

「え？ ええ！？」

でもこれはさすがに恥ずかしさが勝ったらしく、すぐに顔が真っ赤になってしまったので、

「ごめんごめん。ほら、玉置ちゃんもおいでー」

「うん！」

「お母さんっ！？」

一緒だったら平気でしょと思って、隣でうらやましそうにしてた子を誘ったら、

「ぎゅー」喜んで飛びついてきた。

「ん？ 玉置ちゃん、ちよっと体冷たい？」

「あたし、体温低いからっ」

「そっか、ならしっかりあったためてあげよう」

「……もう、お母さんったら」

口をとんがらせつつも、しがみついてくるあたり、さらに愛おしいんだな。

もっといっぱいぎゅーつてしてたら、私の腕の中で未佑と玉置ちゃんもぎゅーつとなつて、

「あたししあわせ」

玉置ちゃんがしあわせそうにとろけてきたのできつと大成功。

こんなことで喜んでくれるんだったら、ほんといくらでもできるから。

私がこの子たちのためにして上げられることって、本当にはそんなに多くないのだろうけど。

愛情だけは、他の母親にも負けないつもりなので。

だから、

「二人とも、夏休みになったら、海行こっか」

二人の頭をなでながら、今の仕事をどう片づけるかを、もう考え始めている私なのでした。

「もう、お母さんってば」

「あはは、ちよっとやりすぎたか」

我が家恒例のただいまのぎゅーつを散々しあつてみたら、玉置ちゃんが、溶けてしまった。

「あたしにはまだ未佑ママちよっとレベル高すぎた」

と言ったきり、緩みきった顔で床に伸びてしまったのを未佑と見下ろす。

「もうさわつちやダメだからね。きつとまた嬉しくなっていくまでも起きてこなくなるから」

「まるでウサギと反対だね」

こんな子が本当に一人暮らしなんて出来てるんだろうか。

少し心配になる。

「夏休み入ったら、ずっと遊びに来ててもいいからね」

「もう、ダメだって」

「声かけるのもダメ？」

「甘やかされなれてないから、ちよつと甘やかしたただけでも喜んじゃうんだから」

うーん。

「まるでどこかの誰かさんみたいだね」

「わたし、こんな風じゃないもん！」

「あれ？ お母さん、未佑のことだなんて一言も言っていないだけだな？」

「~~~~っ」

ああ、ダメだ。

もうほんと、うちの娘かわいい。

なので、もう少しからかってみたくなっても仕方ないよね。

「というか、つまり未佑は普段から玉置ちゃんを甘やかしてるってことかー」

「う」

「家では、いつも私に甘えてくる側なのになー？」

「それはっ」

「ほおら、今日も甘えていいんだぞー」

「もうっお母さんっ」

「未佑かわいい」

「っ！」

そうやって私が愛娘を愛でていたら、

「未佑ママ」

「ん？ 玉置ちゃん？」

転がってた玉置ちゃんが、一変、真剣な表情で私の目を見て、

「未佑はね、ほんとかわいいんだ」

おおー。

途中からすんごく嬉しそうに言いきった。

「ちよつと！ 玉置まで！」

「わかってるね？」

「わかってます」

「もうっ！ 二人して」

そんな風に。

恨めしげな顔と、しあわせいっぱい顔にはさまれて。嬉しい苦笑いを浮かべる私でした。